

学校名	埼玉県立常盤高等学校
-----	------------

平成30年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール 事業計画書

I 委託事業の内容

1. 研究開発課題名

5年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発

～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～

2. 研究の目的

本研究では、看護専門職者に求められる力は、新たな医療技術の進歩や社会の変化に柔軟に対応するために必要な「生涯学び続ける力」であるという考えのもとづき、様々な取組を行っている。「生涯学び続ける力」は、その要素である広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」における各取組で身につけた力を統合し、新たな課題を発見し自ら解決する力であると捉えている。本研究の目的は、「生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力」を身につけ、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することである。そのために、これまでの教育活動を見直すとともに、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことに重点を置いてきた。

3. 実施期間

契約日から平成31年3月15日まで

※ 最長で当該年度の3月15日（3月15日が行政機関の休日に当たる場合は直前の開庁日）まで

4. 当該年度における実施計画

これまでの4年間で取り組んできたことは、先行的な取組も含めシラバスに明記され、本校の教育活動に定着してきおり、今年度も継続して実施する。また、今年度は、指定最後の年であり、SPH指定年度に入学した生徒の「育てたい力（身に付いた力）」の変容を評価していく。「SPHで身に付く力～実習ルーブリック～」による変容と、「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」「生涯学び続ける力」それぞれの取組による変容をとらえていく。

さらに、4つの力を育てる5年間の取組のプロセスの総括を行い、シラバスに取入れたものの評価と、指定終了後に継続する取組について内容の精選を行う。そして、これまでの取組を総括したそれぞれの柱が目指す「育てたい力（身に付く力）」を育てるための5年間のプログラムを作成し、全国に発信できるように研究を進めていく。

(1) 「豊かな人間性」を育てる取組

地域で行われている様々な活動等を通して地域で行われている活動を知り、奉仕の心を育て、命の大切さについて考える豊かな人間性を養うとともに、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、広い視野に立った看護観の確立を目指す。自己理解や他者理解を深め相手を尊重し思いやりのある心を持ち、自他の生命を尊重する態度を養い、看護のみならず広い視野に立ち人間を理解することのできる人間性を身につけることをねらいとする。各活動における「育てたい力」を通して、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、新たな時代や場面に応じた対応ができる力を身につけることを目指している。

これまで、高校3年間にボランティア活動などの「夏休み地域活動体験」を通して地域で行われている活動を知り、その経験を共有するという活動を行ってきた。専攻科では、さらに「看護観を育てる取組」として、各領域で行われている生命倫理に関する授業を関連づけ、命の問題について深く考える取組を行っている。この「豊かな人間性」を育てる一連の取組を通して、生徒は心を動かされ迷いながら自分なりの考えを持つことができるようになってきている。この自分なりの考えを持つことは、看護観形成の基礎となるものととらえている。

今年度の取組として、「夏休み地域活動」「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」の5年間の取組を総括し、教材や指導案を含む「豊かな人間性を育てる」プログラムを作成する。

a. 各学年の到達目標と「育てたい力」

	夏休み地域活動体験	看護観を育てる取組 (ライフステージからみた生命倫理に関する授業)	
育てたい力	・社会への参画 ・事態への対応力 ・礼節 ・共有する力	・時代の事象を見る力 ・情報の取捨選択力 ・自己決定力 ・状況判断力	
高校1年	地域で行われている活動を知る。年代の異なる人とのかかわりの中で相手を思いやる心や奉仕の心を育てる。 自分の経験を他者に伝えることができる。	協力、責任感、連携など人との関係やチームの一員としての立場を考えた行動をとることができる。 看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。	
高校2年	地域での活動体験を通して、他者を尊重する事の大切さや、自分の果たせる役割について考えることができる。 看護での学びを活かした活動について考えることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う（SPHでの取組はなし）。	
高校3年	看護での学びを生かした地域活動体験を行う。周囲の状況を判断し、その場に合わせた行動をとることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う（SPHでの取組はなし）。	
専攻科1年	看護での学びを生かした地域活動体験を行い、経験を通して、自分なりの看護観を持つ。 ※「ヘルスプロジェクト」に関する地域リサーチ	人生各期において生命倫理における課題や問題点があることを理解する。 宮城県への宿泊研修により、被災地の現状を知り、理解を深め自分にできることを考えることができる。	信頼関係を構築するためのコミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させる。
専攻科2年		臨地実習において、これまでに身につけた、倫理観や看護観に基づいた看護を実践する。	精神面を充実し、看護の職業に従事する者として、人間関係を円滑に保つためのコミュニケーションを実践する。

b. 「育てたい力」の観点

ア) 夏休み地域活動体験

育てたい力	観 点
社会への参画力	自ら体験する活動を選び、申し込むことができる。 地域における活動のニーズを把握できる。
事態への対応力	周囲の状況を判断しその場に合わせた行動を取ることができる。
礼 節	様々な年代の人と交流し、相手の心や状況をふまえた行動や作法ができる。他人のために尽くす奉仕の心を持つことができる。
共有する力	一人一人が持っている知識や経験を出し合い、分かち合うことができる。

イ) ライフステージからみた生命倫理に関する授業

育てたい力	観 点
時代の事象を見る力	社会のできごとに関心をもって見ようとする力
情報の取捨選択力	目的に合った情報を選びとれる力
自己決定力	自分の考えで物事を決める事ができる力
状況判断力	相手やその場の様子をつかみ、どうしたらよいか決められる力

c. 「豊かな人間性を育てる」プログラムの構想

「夏休み地域活動」

- ・ 高校1年生への活動のオリエンテーションの方法（高校2年生との交流）
- ・ 生徒が夏休みの活動を決定するプロセス
- ・ 活動の報告書作成と文化祭での展示
- ・ グループワークを通じた活動の共有

「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」

- ・ ジレンマを感じられる事例を用いた教材
- ・ 生徒への事例（教材）の提示の仕方と授業の進め方
- ・ 生徒の思考を深めるワークシートづくり
- ・ まとめのグループワーク（臨地実習でのジレンマ体験を通して、考えを深める）

以上、授業の指導案や教材、ワークシートを精選し、作成したプログラムを発信していく。

d. 変容の捉え方（評価の方法）

S P H指定時入学生が、高校3年生の時に専攻科で実施する「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」にもとづいた「命の問題に関する意識調査」を行っている。今年度、専攻科2年生での「まとめのグループワーク」が終了した後に、意識の変化について再度調査し、定量的にその変化を分析する。

授業で取り入れているグループワークの中で、生徒は、他者の意見を聞くことにより新たな考えを持ち、思考を深め、様々な考えがあることに気づく。「まとめのグループワーク」では、そのテーマが自分で感じているジレンマを題材にしているためか、看護師のあるべき姿や今後の自分のありかたなど、教員が意図していない部分まで生徒は深く考えることができている。これは看護観形成の基礎となるものと考えられる。これまでは、定性的な評価として、生徒のワークシートの記述内容や感想を用いていたが、グループワークを通して生徒は多くの意見交換をしている。そこで、今年は、ボイスレコーダーを活用して生徒の生の声から、感想やアンケートの結果からは測ることのできない生徒の変容について評価に活用していく。

(2) 「確かな知識・技術」を育てる取組

I C Tの活用やアクティブ・ラーニングを通して、自発的な学習を促し、確かな知識の定着を目指している。臨床に即した看護実践能力を育てることを目指し、育てたい力を「臨地でのイメージ力」、「知識力・技術力」、「情報活用能力」としている。これまでに、I C Tの活用やアクティブ・ラーニングの実践、感染管理認定看護師などの専門家による特別講義や共同授業を企画し、S P H活動としてシラバスに組み込んできた。

また、「学年に応じた技術の統合実践の到達度」に基づき看護実践で行うことの多い「寝衣交換」「シーツ交換」「移乗」「バイタルサイン測定」の4つの看護技術をピックアップし、「学年ごとの看護技術の到達度（ラダー）」を作成した。生徒が看護技術の習得とその成果を自ら確認するツールとして活用し、学年末に実施する実技テストや実技コンテストにおいて、この4つの技術の到達度を振り返り評価している。専攻科では、専攻科において、高校までに身に付けた力を統合して実践するために場面を設定した実技テストや、多重課題の演習では、模擬的な環境の中で行うシミュレーション教育の技法を活用した授業も行っている。

今年度の取組として「学年に応じた技術の統合実践の到達度」の活用と、「実技テストや実技コンテスト」により、生徒自身が技術の到達度を評価する方法について検討する。そして、5年間の取組を総括し、教材や指導案を含む「確かな知識・技術を育てる」プログラムを作成する。

a. 各学年の到達目標と「育てたい力」

	I C Tを活用したアクティブラーニングによる授業の開発	専門家による特別授業	学年に応じた技術の統合実践の到達度 (実技テスト・実技コンテスト)
育てたい力	・情報活用能力	・臨地のイメージ力 ・知識・技術力	・臨地のイメージ力 ・知識・技術力 ・情報活用能力
高校1年	基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用し、基礎的な知識・技術を身につけることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。		基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。原理原則を理解した上で実施できることを目標に日常生活援助技術を身に付ける。
高校2年	基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用するとともに、臨地実習時に患者のケアに役立てることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	臨地実習のイメージが付き、不安を軽減できる。 認定看護師等の授業を通して、患者が療養生活を送る中で、医療事故の発生を回避するための知識・技術をイメージすることができる。併せて生徒自身の危険性を予測し、感染や放射線曝露から身を守ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。患者の環境を整え、安全・安楽を考えて実施できることを目標に、臨地実習で求められる基礎的な看護技術の定着を図る。
高校3年	基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用する。また、臨地実習を通して、受け持ち患者の状況に応じた援助を考えることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	専門家による講座を受け、これまでの知識を関連づけ臨地（病院・災害時）をイメージするとともに、専攻科での専門家による授業への準備を進める。	基礎看護における「看護技術テスト」に個人で取り組む。患者の個性を重視し、決められた状況に応じて実施できることを目標に、臨地実習で求められる応用的な看護技術の定着を計る。
専攻科1年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考えることができる。		「技術の統合I」で患者を想定した事例に合わせた実技試験を実施する。臨床をイメージし状況に応じて実施できることを目指す。

専攻科 2年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考え、実施し評価することができる。		「技術の統合Ⅱ」で複数患者の多重課題の場면을想定した授業を実施する。優先順位を考え、実施できることを目指す。
-----------	--	--	--

b. 「育てたい力」の観点

ア) 学年に応じた技術の統合実践の到達度

育てたい力	観 点
情報活用能力	必要な情報を最適な方法で収集し、分析や判断に活かすことができる。 ・授業の予習復習にナースングスキルを有益に活用できる。 ・看護援助技術手順書作成にナースングスキルを有益に活用できる。 ・タブレットを用いて、看護援助技術映像等を視聴し、技術イメージ化できる。 ・タブレットを用いて、自分の実技を録画し視聴することで、自分の援助技術を振り返ることができる。
臨地のイメージ力	援助においてプロセスや成果をイメージして実施できる。
知 識 力	既習の知識が定着し、またさらに知識を得ようと自発的に意欲的に学習学習できる。 必要な看護技術を習得し、安全・安楽に実施できる。

学年に応じた技術の統合実践の到達度

	多重課題に対応するための技術を身に付ける。診療の補助の技術を身に付ける	専攻科 2年
	臨床をイメージし、状況に応じた方法で日常生活援助を行うことができる。	専攻科 1年
	状況設定をして、患者の同意を得た上で、安全安楽を保ち同意を得ながら日常生活援助ができる	看護科 3年
	患者の環境を整え、安全を守る技術の基礎を身に付ける	看護科 2年
	技術の原理原則を理解できた上で実施できる	看護科 1年

※看護科1年から3年までを看護技術の土台とし、専攻科1年から2年は看護の応用力として示した。

c. 「確かな知識・技術を育てる」プログラムの構想

「学年に応じた技術の統合実践の到達度」

- ・「寝衣交換」「シーツ交換」「移乗」「バイタルサイン測定」の4つの看護技術の学年毎のラダー（コミュニケーションと観察の視点を含む）とその活用方法（振り返りを含む）について

「実技テスト・実技コンテスト」

- ・高校1年生から専攻科2年生で行っている、技術の到達度を確認するための実技テスト、実技コンテストの授業の指導案や教材、ワークシートを精選し、作成したプログラムを発信していく。

d. 変容の捉え方（評価の方法）

昨年までの報告から、ICTの活用やアクティブ・ラーニングにより、生徒は学び方を身に付けていることが分かった。その知識・技術の到達度を学年ごとに評価するために、「学年に応じた技術の統合実践の到達度」を作成した。各学年で実施している実技コンテストや実技テストの到達度は、昨

年度、作成した技術の評価表（本校3年次研究実施報告書P. 51～54）と従来から活用していた本校の実技テストの評価表をもとに生徒の実技を評価している。実技コンテストや、実技テストの後に生徒自身の振り返りは行っているが、この「学年に応じた技術の統合実践の到達度」を活用した継続性のある生徒の振り返りはまだ実施できていないため、今年度検討し評価していく。

（3）「科学的思考・判断力」を育てる取組

科学的な視点を取り入れた授業や学習活動を通して、専門職者に求められる論理的思考力の育成を図ることをねらいとしている。科学的思考・判断力の取組を通して「情報を見極める力」「思考スキル」「論理的に考える力」「科学的視点」「文献検索する力」「クリティークする力」を育てることを目指している。高校1年生から科学的根拠（エビデンス）について、実験や計測を通して確かめたり、得られたデータから考えてみる経験をさせる授業を展開している。また、連携している大学の施設・設備・実験機器を用いた、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座もシラバスに組み込まれ、SPH特別講座として本校の教育活動に定着した。

専攻科では、学術論文をクリティークする機会を増やし、専攻科2年生が行う「看護研究」の質を高める事を目指して様々な取組を行っている。昨年までの報告より、クリティークループリックを活用した評価により、回数を追うごとに評価が高くなる生徒が増えること、専攻科2年生の看護研究において活用している文献が、過去の卒業生では教科書や参考書が多かったものの、今年度は学術論文の数が多くなり、一定の成果が表れている。

今年度の取組として5年間を総括し、「科学的思考・判断力」を育てるための科目を横断した取組をプログラムとしてまとめる。

a. 各学年の到達目標と「育てたい力」

	実験的要素を含んだ学習体験	大学との連携による専門性の高い学習	看護研究方法
育てたい力	・情報を見極める力 ・思考スキル ・論理的に考える力 ・科学的視点 ・文献検索する力 ・クリティークする力		
高校1年	看護に関連した学びを通して、科学的根拠（エビデンス）の大切さがわかる。	「基礎看護」に関連した専門性の高い講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際を経験する。	
高校2年	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、看護に関連した実験的要素を含んだ学習体験を通して、看護技術の根拠を確かめる。	「栄養」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際について理解を深める。	文献検索の方法がわかり、初歩的な文献検索ができる。 初歩的なデータ処理ができる。「看護情報活用」で、研究の倫理について学ぶ。
高校3年	高校2年生での経験を発展させ、「研究の問い」を意識したテーマを設定し、実験的要素を含んだ学習を体験する。	「薬理」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集について理解を深める。	設定したテーマにそって文献検索やクリティークを経験する。 研究計画書の作成を経験する。
専攻科1年	文献検索を十分にを行い、「食後の血糖上昇実験」を通して、得られたデータを分析することができる。		研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考えることができる。文献検索を行い、事例研究を進めることができる。 「統計」で研究の倫理について理解する。
専攻科2年			研究計画書に基づいて看護研究に取り組み、論文としてまとめ、発表することができる。倫理的配慮にもとづき、患者より同意を得る。

b. 「育てたい力」の観点

ア) 生徒の自己評価

育てたい力	観 点
情報を見極める力	その情報が真実かどうか考え、判断する力
思考スキル	解決するために無駄なものを捨て、重要な事実をもとに考えを組み立てる力
論理的に考える力	自分の頭と自分の意志で筋道を立てて考える力

イ) 教員による客観的評価（科学的思考・判断力の活動を通して育てたい力）

育てたい力	観 点
科学的視点	授業（実験的体験・専門性の高い講座の受講）を通して看護実践におけるエビデンスの大切さがわかる
文献検索する力	学術論文について、検索エンジンを使った初歩的な文献検索ができる
データ処理する力	初歩的なデータ処理の方法がわかる（平均値・標準偏差・相関係数）
クリティークする力	研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考え、意見や考えを述べることができる

ウ) 「クリティークする力」のルーブリック評価

評価 5	評価 4	評価 3	評価 2	評価 1
論文を精読して理解し、クリティカルに論文の価値を判断しており、具体的に指摘しながら、論理的・多角的に自分の意見や考えが述べられている。	クリティークの視点で論文を読み、研究プロセスの妥当性や価値について判断しており、自分の意見や考えが具体的に述べられている。	クリティークの視点で論文を読み、研究プロセスの妥当性や価値について、部分的に、自分の意見や考えが述べられている。	クリティークの視点に沿って考え、評価しているが、具体的に自分の意見や考えを述べるには至らない。	未記入部分が多いまたは、クリティークの視点を意識した記述になっていない。

c. 「科学的思考・判断力を育てる」プログラムの構想

「科目を横断した取組」

- ・エビデンス探求プロジェクトの指導案と教材
- ・実験的な要素を含む授業の指導案

「看護研究方法」

- ・文献の精読とクリティークルーブリックの活用について
- ・看護研究の授業の指導案、ケーススタディルーブリックの活用について

d. 変容の捉え方（評価の方法）

S P H指定時入学生（13 回生）の変容を評価するために、「クリティークする力」の変化による評価を継続して行い変化をみる。また、専攻科 1 年生で書く「ケーススタディ」と専攻科 2 年生で行う「看護研究」の記述内容をケーススタディルーブリック（本校 3 年次報告書 P. 56）を用いてその変容を評価する。

また、文献の活用状況の変容をみる。その方法として、引用文献を「教科書レベル（教科書として採用されているシリーズ図書）」「専門図書・学習雑誌」「学術誌・専門誌」「インターネット・その他」の 4 つに分類し、学術的なもの、先行研究を扱う引用文献が増えているかについて分析を行う。

昨年までの報告から、S P Hの先行学年の看護研究では、S P H指定前の生徒が活用していた文献よりも、「学術誌・専門誌」の活用状況が増えていることが分かっている。

(4) 「生涯学び続ける力」を育てる取組

「生涯学び続ける力」は各々の生徒が持つ「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を統合する力と捉えている。本校では、SPH指定時より「生涯学び続ける力」を育成するためにプロジェクト学習を取り入れている。プロジェクト学習で身に付く「イメージする力」「課題発見力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」は、「生涯学び続ける力」になるととらえている。これまでのプロジェクト学習の成果としては、生徒の感想の分析から、学年が上がるにつれて「身に付く力」の記述内容が、より具体的にになり思考が深まったことや、合同プレゼンテーションを行うことですが、下級生が上級生を見て目標としたり、上級生が下級生を見て自分の成長に気付いたりするなど、異学年に対して良い効果があった。また、高校1年生から専攻科2年生までの各学年が取り組むプロジェクトが体系化したため、その成果を発表する「公開プレゼンテーション」を平成29年度より校外で行っており、今年度も9月15日（土）に大宮のソニックシティで行う予定である。

さらに、SPH指定時の入学生が専攻科2年生となり、就職や看護師国家試験へ向かう年であることから、生徒の目標達成へ向け、ポートフォリオを活用した取組を進めている。進路指導部と協力して、将来の自分をイメージしながら進路を決定することができるよう、キャリアプラットフォームを継続して活用していく。また、新人教育担当者による「臨床で求められる新人看護師」や、ハローワークの担当者による「就職活動を乗り切るための面接技法」など、進路に直結する講演や演習を行う。

今年度の取組として、各学年で行うプロジェクトの5年間の取組を総括し、各プロジェクトで活用した教材や指導案を含む「生涯学び続ける力を育てる」プログラムを作成する。

a. 各学年の到達目標と「育てたい力」

	ポートフォリオの活用	プロジェクト学習
育てたい力	・イメージする力 ・課題発見力 ・課題解決力 ・コミュニケーション力 ・プレゼンテーション力	
高校1年	パーソナルポートフォリオを作成し、自分が力を入れて取り組んだことを可視化することで、自己肯定感を向上する。	防災プロジェクト「常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！」 ナイチンゲールプロジェクト「大切な人の健康を守る方法を提案します！」 プロジェクト学習の手法を身につける。 「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」を身につける。
高校2年		エビデンス探求プロジェクト「エビデンスに基づいた看護技術を提案します！」 疑問に思ったことを明らかにするために、自ら課題を発見し、先を想像し、具体的に予測を立てることで課題を解決しようとする力を身につける。
高校3年	パーソナルポートフォリオをキャリアポートフォリオにして継続させ、看護、医療に関する新聞・雑誌などの記事や書籍のリスト等を資料化し、自分が目指す看護像について意識啓発を図る。キャリアプラットフォームの活用。	キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」自分を知り、将来の看護師像について考える。キャリアポートフォリオの作成。
専攻科1年		ヘルスプロジェクト「疾患を抱えていても自らの健康をコントロールし改善する方法を提案します！」 看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 キャリアプロジェクト：自分の将来の看護師像を思い描くことを目指す。
専攻科2年		キャリアプロジェクト：看護の専門職者を目指すものとして、将来自分の目指す看護師像を思い描き、それに向かって行動することができる。

b. 「育てたい力」の観点

ア) ポートフォリオの活用

「成長エントリー」として、学年末に自分が1年間で成長したことや、具体的な行動変容を書き出しながら振り返りを行い、次の目標への取組を明確にすることができる。

イ) プロジェクト学習

育てたい力	観 点
イメージする力	先を想像し、具体的に予測することができる
課題発見力	状況を判断し、課題を見いだすことができる
課題解決力	最善の方法を見いだし解決することができる
コミュニケーション力	他者と意見を交換し、共有することができる
プレゼンテーション力	伝えたいことを表現し、相手を納得させることができる

c. 「生涯学び続ける力を育てる」プログラムの構想

「プロジェクト学習」

- ・防災プロジェクト、エビデンス探求プロジェクト、ヘルスプロジェクトの授業の進め方を記した授業案
 - ・対象者の事例
 - ・R10の理解を深めるワークシート
 - ・R10をもとにありたい像を考えるためのワークシート
- 以上、授業の指導案や教材、ワークシートを精選し、作成したプログラムを発信していく。

「合同プレゼンテーション」

- ・合同プレゼンテーションへ向けた準備のタイムスケジュール

「キャリアプロジェクト」

- ・キャリアプロジェクトの活動の進め方について
- ・作成したワークシート
- ・キャリアプラットフォームの活用について

d. 変容の捉え方（評価の方法）

昨年度までの報告で、プロジェクト学習は「イメージ力」「課題発見力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」が身に付き、生徒の学びを深めることが見えてきている（本校「研究実施報告書」3年次 p.69 参照、4年次 p.67 参照）。SPH指定時の入学生が5年間の取組の終了時に、SPHの活動を通して「身に付いた力」を自由記述し、「生涯学び続けること」に関連した記述を中心に内容を分析する。

キャリアプロジェクトについては、専攻科修了時に評価できるものではないが、短期的な評価としてSPH指定時入学生の進路決定の状況から評価する。

（5）SPHで「育てたい力を養うための専門家による特別授業」

a. 「豊かな人間性」看護観を養うための外部講師による特別授業

対人関係を苦手とする生徒が増えている傾向にあることから、特別非常勤講師と連携し、当該講師の担当授業「人間関係論」の中で人間を理解し対人関係を円滑にし、コミュニケーション力の向上をねらいとする演習を実施する。また、看護と共通するテーマ「高齢者」「小児」「カウンセリング」に関する他職種の専門家による講義を受けることで、視野を広げ、他職種との連携について理解することを目指す。

	内容	連携先	対象学年
	対人関係力 up 講座	専攻科外部講師	専攻科 1 年生
精神看護概論	ストレス対策とうつ予防	聖学院大学	専攻科 1 年生
母性臨床看護	子ども虐待とネグレクト	聖学院大学	専攻科 1 年生
在宅看護技術	高齢社会の元気高齢者に関すること	聖学院大学	専攻科 1 年生
	社会福祉士を目指す学生との交流	聖学院大学	専攻科 1 年生

b. 「確かな知識・技術」専門家による特別講座（高校 2 年生～専攻科 1 年生）

病院や大学で活躍する専門家による授業を、高校 2 年生から学習進度や目標に合わせて導入することで、最新の知識習得や臨床のイメージを高めることを目的とする。導入に当たっては、講座の前後に教員が授業の導入やまとめを行い、日頃の授業との関連づけができるようにする。

また、専門家による特別講座により、病院実習に役立て病院や患者をイメージすることができ、不安の軽減につながることを期待できる。

時間	内容	連携先	対象学年
基礎看護	医療現場における感染管理	実習病院	高校 2 年生
基礎看護	放射線の基礎知識、放射線曝露からの防御	日本科学技術振興財団科学技術館	高校 2 年生
成人看護	放射線治療について	日本科学技術振興財団科学技術館	高校 3 年生
基礎看護	フィジカルアセスメント（聴診法）	実習病院	高校 3 年生
成人看護	がん看護「がんを抱えながら生活する人の看護」	実習病院	高校 3 年生
基礎看護	災害看護「災害時に看護学生ができることを考える」	実習病院	高校 3 年生

c. 「科学的思考・判断力」大学との連携による専門性の高い学習

「看護」に関連した授業の一環として、大学と連携し、大学の施設・設備・実験機器を使用して、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座を受講する機会を作る。

科目	内容	連携先	対象学年
薬理	クスリが作用する仕組みを理解する	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	クスリの作用・副作用・相互作用の基本的な考え方	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	アルコールの体内代謝	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	医薬品と動植物～クスリと食品の違いとその実際	日本薬科大学	高校 3 年生
栄養	塩の働きと過剰摂取について	女子栄養大	高校 2 年生
栄養	思春期のダイエットの弊害、体脂肪率、骨密度測定	女子栄養大	高校 2 年生
基礎看護	食事の援助&口腔ケア	埼玉県立大学	高校 1 年生

（６）「SPHで身に付く力～実習ルーブリックの活用～」

SPH指定時入学生の高校３年生から専攻科２年生のルーブリックの変化を用いてSPHの取組による変容を評価する。

昨年度までの研究により、課題として専攻科２年生での生徒による自己評価と、教員による他者評価に差があり、教員の評価が低くなっていることが分かった。ルーブリックで評価する際の目指す姿と、観点別の実習評価との違いを再度教員間で確認する必要がある。また、教員の評価が低いと、面談の際にも生徒の自己評価を下げってしまう可能性があり、面談による生徒の自己評価への影響も考えられる。

今年度のルーブリック評価には、昨年度作成したものを使用するが、項目の中にはルーブリックの段階の設定や、文字数、標記の仕方には改善の余地がある。また、ルーブリックを教育活動の中でどのように生徒にフィードバックしていくのかを合わせて検討していく

	SPHで身につけたい力	ありたい像	5	4	3	2	1
豊かな人間性 (常盤高校が考える豊かな人間性)	他者を尊重する	人の話をよく聞きその内容をもとに他者を尊重し、他者に配慮し、倫理にもとづいた行動ができる。	他者の意図を汲み取ろうと自分の聞く態度に配慮して他者が話しやすい雰囲気を作り、他者を尊重して善い方に向けた行動ができる。	話の内容を確認しながら話を聞き、他者が意図していることを汲み取り、善い方法を考えることができる。	相槌を打ちながら他者の話を素直に聞き入れることができる。	他者の話を聞くことができるが、自分の意見を優先しがちである。	他者の思いに目を向けることができていない。
	協調性	場の状況をよみ自分の役割を理解し、その役割を果たすことができる。	チームの中で、リーダーシップを発揮することができる。場に合わせた「ほうれんそう」やカンファレンスでの積極的な発言ができる。	チームの中でメンバーシップを果たすことができる。場に合わせた行動ができる。	場に合わせた行動ができる。チームメンバーへの配慮がある。	他のメンバーへの配慮が少ない。場に合わせた行動も乏しい。	他のメンバーへの配慮がない。場に合わせた「ほうれんそう」がなく、カンファレンスでの発言も少ない。
	自己理解 折れない心 高い志	粘り強くあきらめずに取り組むことができる。	自分の思いと異なる事象が発生した際に、それを解決するための方策を考え、実践することができる。	自分の思いと異なる事象が発生した際に、それを解決するための方策を考えることができる。	自分の思いと異なる事象があっても前向きに取り組むことができる。	自分の思いと異なる事象に向き合おうとする。感情のコントロールができない。	自分の思いと異なる事象に対して向き合わず、あきらめてしまう。感情のコントロールができない。
	豊かな感性 協調性	他者の立場に立って、思いを汲み取り優しく思いやりのある行動ができる。	柔軟性をもって患者の思いを汲み取り、行動計画、実施に反映させ最適なケアを実践することができる。	患者の思いを汲み取りケアを考え、行動計画に反映させ実践することができる。	患者の思いに気づくことができる。行動計画に反映させることができる。	患者の思いに気づくことができるが、それに対応するための行動に至らない。	患者の思いに気づくことができない。
	社会人の基本スキル	社会の一員として良識を持ち、規範を守り、責任のある行動をとることができる。	常に、時間管理ができる。TPOに応じたあいさつができる。礼儀正しく規律を守ることができる。他の生徒の模範となる行動ができる。	常に、時間管理ができる。TPOを考えたあいさつができる。礼儀正しく規律を守ることができる。	自分からあいさつができる。時間を守る、提出物の期限を守る等の約束事を守る事ができる。	助言を受けて、時間を守り、提出物の期限を守る事ができる。また、自分からあいさつすることができる。	助言を受けても時間が守れず、提出物の期限も守られない。また、自分からあいさつすることができない。
確かな知識・技術	臨地のイメージ力	援助においてプロセスや成果をイメージし、実施できる。	対象の状況を十分にイメージし、手順書を作成し、最も適した方法で実施できる。かつ、患者に起こりうる危険を予測し、回避する行動がとれる。	対象の状況をイメージし、個別性を反映した手順書は作成し、実施できる。かつ起こりうる危険性を予測している。	対象の状況をイメージし、個別性を反映した手順書は作成し、実施できるが、起こりうる危険性を十分に予測できていない。	対象の状況をイメージし、標準的な手順書を作成し、実施している。	標準的な手順書を作成し、実施している。
	知識・技術力	既習の知識が定着し、またさらに知識を得ようと自発的に意欲的に学習できる。	既習内容が定着している。かつ自発的な学習を通して獲得した知識を活用している。	既習内容がほぼ定着しており、助言により新たな知識を獲得している。	助言をもとに必要な知識を意欲的に獲得している。	助言をもとに必要な最低限の知識を獲得している。	知識が不足し、学習意欲も感じられない。
		必要な看護技術を習得し、安全・安楽に実施できる。	対象の生活背景や個性に合わせて、優先順位を考えたうえで、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	対象の個性に合わせて、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	環境を整え、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	原理原則に基づいた援助が安全に・安楽に実施できる。	原理原則に基づいた援助が（安全に・安楽に）実施できない。
	情報活用能力	必要な情報を最適な方法で収集し、分析や判断に活かすことができる。	対象の状況をふまえ、把握するための技術を適切に実施（VS・フィジカルアセスメント）し、その情報をアセスメントしている。	対象の状況をふまえ、把握するための技術を適切に実施（VS・フィジカルアセスメント）している。	対象の状況を把握するための技術（VS・聴診法等）を実施している。	対象の状況を把握するための技術を正確に実施している。	対象の状況を把握するための技術が正しく実施できない。
科学的思考・判断力	論理的に考える力	専門知識を最大限活用して現象を的確にとらえ、論理的に考えて判断することができる。かつ、適切な表現で記録することができる。	対象の個別の状況を的確にとらえ、看護の必要性について、専門職者として個性を考慮して的確に判断することができる。	対象の状況をある程度的確にとらえ、看護の必要性について、個性を考慮して判断することができる。	対象の状況を的確にとらえ、看護の必要性について、判断することができる。	対象の概要はある程度とらえてはいるが、看護の必要性を考えるとできない、または、考えてはいるが適切な判断とは言えない。	対象の概要をとらえられず、看護の必要性に気付けない。
	科学的視点（思考スキル）	看護実践において科学的根拠や有効性・妥当性を考え、対象にとって最も適した看護の方法を考えることができる。	看護実践において科学的根拠や有効性・妥当性を考え、個性を考慮して最適な看護の方法を考えることができる。	看護方法を実践するにあたって、個性を考慮し、科学的根拠とその有効性・妥当性について検討している。	看護を実践するにあたって、根拠と、その有効性について考えることができる。	標準的な看護を実施するとき、根拠を自分なりに考えることができる。	標準的な看護を実施する理由について、考えることができない。あるいは、実施すべき看護を考えることができない。
	文献検索力（情報を見極める力）	臨地実習を通して感じた疑問から、研究課題を見出し、文献検討して、研究疑問を精練することができる。	臨地実習を通して感じた疑問から、先行研究を検索し、研究につなげることができる。	臨地実習を通して感じた疑問から、課題を見出し、先行研究を検索することができる。	実習を通して何らかの疑問を感じ、看護に関する情報を集めている。	実習を通して感じた疑問はあるが、看護に関する情報の収集には至らない。	実習での経験に客観的な疑問を感じるがない。
	クリティカルシンキング（論理的に考える力）	クリティカルな視点で看護実践を振り返り、効果と妥当性を評価・考察し、次の実践に向けて新たな検討ができる。	対象の反応から看護実践の効果と妥当性を考え、客観的に評価・考察するとともに、次の実践に向けて新たな検討ができる。	自分の看護実践の効果と妥当性を考え、客観的に評価することができる。	自分の看護実践を振り返り、その効果と妥当性について考えることができる。	自分の看護実践について、患者の反応などから効果を振り返ることができる。	自分の看護実践の振り返りの必要性を感じない。
生涯学び続ける力（3つを統合して得る力）	イメージする力	自分がこれからすることを具体的に思い浮かべ、先を予測できる。	自分がやるべきことは何かを見極め、自ら取り組むことができる。	自分のありたい像をイメージし、行動するヒントを自ら探すことができる。	周囲からアドバイスにより、期待されている自分の役割を把握して行動することができる。	自分のありたい像をイメージできるが、どう行動したらよいか、わからない。	自分のありたい像をイメージできない。
	課題発見力	自分の現状を見て問題点を見いだせる。	自分を客観的に評価することにより、課題を発見し、解決策を見つげることができる。	課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求め、分析できる。	現状を正しく認識するために、情報収集することができる。	自分の現状に問題があると気づいている。	自分には問題がないと考えている。課題を発見しようとする意欲がない。
	課題解決力	目の前の状況を見て自分の問題を発見し、知恵を出して解決・実行できる。	目標達成に向けて粘り強く、困難な状況から逃げずに挑戦できる。更にその計画を俯瞰し、進捗状況や不測の事態に合わせて柔軟に行動を修正できる。	目標達成に向けて、不測の事態が起きた場合にも、取り組み続けることができる。	予定したことについては計画通り実践できる。他者のアドバイスにより、不測の事態には対応できる。	課題を解決する意欲はあるが、行動に移せない。	課題を解決する意欲がない。困難な状況に立ち向かう気持ちが弱い。
	コミュニケーション力	自分の考えや気持ちを相手と交換できる。	自分の考えを具体的なかつ論理的にわかりやすく伝えられる。同時に、自分の意見を持ちながら、相手の背景や事情を考慮して共感をもって受け入れられる。	自分のことをある程度伝えられ、かつ、相手の事情を理解しようとする態度はみられる。	自分のことを伝える表現力は乏しいが、相手のことを聴こうとする態度はみられる。	自分のことを伝える意欲はあるが表現が乏しく、相手の気持ちも理解することができない。	自分のことを伝えようとする意欲がない。
	プレゼンテーション力	自分の伝えたいことを表現し、相手を納得させることができる。	効果的な手段を活用することで、相手を納得させる、周囲の人を動かす、行動変容させることができる。	効果的に相手に働きかけ、相手の同意を得ることができる。	未熟ながらも自分の伝えたいことが伝わり、相手に理解してもらえる。	自分の伝えたいことを表現し、相手を動かそうとするが、手段が未熟で伝わらない。	相手を動かす意欲がない。

5. 実施体制

(1) 研究担当者

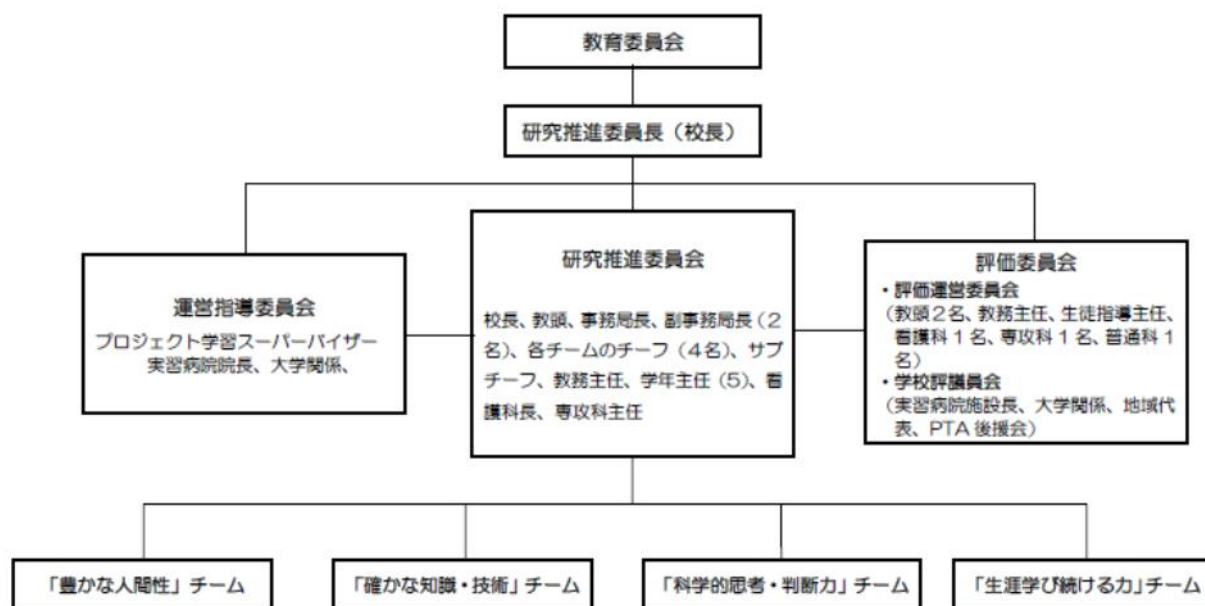
氏名	職名(担当教科)	役割分担
高木 邦子	主幹教諭(看護)	科学的思考・判断力
飯村 洋子	教諭(国語)	豊かな人間性
田尻 茂樹	教諭(地歴公民)	豊かな人間性
三角 定	教諭(数学)	豊かな人間性
高橋 幸雄	教諭(数学)	豊かな人間性
守屋 典子	教諭(理科)	科学的思考・判断力
高見 裕尚	教諭(体育)	豊かな人間性
庄子 学	教諭(英語)	生涯学び続ける力
織田 千香子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
伊藤 玲子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
川口 有理	教諭(看護)	科学的思考・判断力
黒川 章子	教諭(看護)	確かな知識・技術
三津橋 佳子	教諭(看護)	確かな知識・技術
松島 御幸	教諭(看護)	生涯学び続ける力
伊藤 千裕	助教諭(看護)	生涯学び続ける力
川田 礼子	教諭(看護)	確かな知識・技術
大塚 真弓	教諭(看護)	科学的思考・判断力
丸山 祐子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
井口 多恵子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
荒井 すみれ	教諭(看護)	確かな知識・技術
両角 理恵	助教諭(看護)	確かな知識・技術
高部 恭子	助教諭(看護)	豊かな人間性
田中 美妃	助教諭(看護)	確かな知識・技術
榎本 聖子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
柴田 江美子	教諭(看護)	豊かな人間性
伊藤 栄子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
村田 ひろみ	教諭(看護)	豊かな人間性
安藤 志津子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
牛坂 留都	教諭(看護)	生涯学び続ける力
小平 栄子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
井筒 路子	教諭(看護)	豊かな人間性
守屋 有紀	教諭(看護)	豊かな人間性
大貫 由美子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
古場 真理子	教諭(看護)	豊かな人間性
横山 研介	教諭(看護)	確かな知識・技術

中澤 瑞果	教諭（看護）	確かな知識・技術
吉田 佳苗	教諭（看護）	確かな知識・技術
山下 実江	助教諭（看護）	確かな知識・技術
垣花 結花	助教諭（看護）	豊かな人間性
工藤 千恵子	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
益子 友希	助教諭（看護）	科学的思考・判断力
柴田 優子	養護教諭	豊かな人間性
千葉 尚子	実習教員	科学的思考・判断力
堤 映子	主任実習教員	確かな知識・技術
新井 久枝	主任実習教員	科学的思考・判断力
飯塚 智子	主任司書	豊かな人間性

（２）研究推進委員会

氏 名	職名（担当教科）	役割分担
島村 圭一	校長	
有賀 弘一	教頭	
高橋 和弘	教頭	
高木 邦子	主幹教諭（看護）	看護科主任、「科学的思考・判断力」研究班副チーフ
守屋 有紀	教諭（看護）	研究推進委員事務局長
三角 定	教諭（数学）	教務主任、「豊かな人間性」研究班副チーフ
柴田 江美子	教諭（看護）	研究推進委員副事務局長、専攻科 1 学年担任
三津橋 佳子	教諭（看護）	研究推進委員副事務局長、看護科 3 学年担任 「確かな知識・技術」研究班副チーフ
古場 真理子	教諭（看護）	「豊かな人間性」研究班チーフ、専攻科 2 学年担任
中澤 瑞果	教諭（看護）	「確かな知識・技術」研究班チーフ
伊藤 栄子	教諭（看護）	専攻科主任、「科学的思考・判断力」研究班チーフ
大貫 由美子	教諭（看護）	「生涯学び続ける力」研究班チーフ
榎本 聖子	教諭（看護）	「科学的思考・判断力」研究班副チーフ
織田 千香子	教諭（看護）	「生涯学び続ける力」研究班副チーフ、看護科 3 学年主任
伊藤 玲子	教諭（看護）	「生涯学び続ける力」研究班副チーフ

(3) 校内における体制図



※全員が、4つの研究チームに所属して活動する。

※会計に関しては、事務室の協力を得る。

5. 研究内容別実施時期

研究内容		実施時期														
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
豊かな人間性	高1~3	地域・外部機関との連携	看護観を養う取組													
	地域との連携			地域活動体験												
	専1	宮城県への宿泊研修	地域との連携			地域活動体験			看護観を養う取組						ライフステージからみた生命倫理に関する授業	
専2	看護観を養う取組											ライフステージからみた生命倫理に関する授業				
確かな知識・技術	全学年	e-ラーニング活用授業・協調・シミュレーション														
	技術の統合実践															
	高1・2											実技コンテスト				
	高3											実技テスト				
	専1	実技テスト				実技テスト										
科学的思考・判断力	高1	看護技術に関する実験的学習体験														
	高2	プロジェクト学習の手法を用いた研究的学習活動														
	高3	文献検索	看護研究ガイダンス	看護研究講座	実験的経験(実験・講義)	簡単な統計処理・調査・発表										
	専1	研究的学習活動						統計学講義・看護研究講義・ケースレポート								
	専2	看護研究						看護研究発表会								
	生涯学び続ける力	高1	ポートフォリオの活用・プロジェクト学習あり	チームプロジェクト学習「避難所・環境プロジェクト」			公開プレゼンテーション	マイプロジェクト学習「大切な人の健康を守る提案をします！」								
高2		チームプロジェクト「エビデンス探求プロジェクト」			公開プレゼンテーション	チームプロジェクト「エビデンス探求プロジェクト」										
高3		キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」			公開プレゼンテーション	キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」										
専1		チームプロジェクト「ヘルスプロジェクト」			公開プレゼンテーション	キャリアプロジェクト										
専2		キャリアプロジェクト														
SPH特別講座	高1											大学との連携				
	高2											口腔ケア				
	高3	病院との連携 フィジカルアセスメント	大学との連携			病院との連携	放射線	病院との連携	感染管理	大学との連携	栄養	病院との連携	病院との連携			
	専1											放射線治療	薬理作用	災害看護	がん看護	
専1											サイエンスアカデミー	大学との連携	対人関係	大学との連携	他職種連携	

7. この事業に関連して補助金等を受けた実績

なし

補助金等の名称	交 付 者	交 付 額	交付年度	業務項目

8. 知的財産権の帰属

※ いずれかに○を付すこと。なお、1. を選択する場合、契約締結時に所定様式の提出が必要となるので留意のこと。

- () 1. 知的財産権は受託者に帰属することを希望する。
(○) 2. 知的財産権は全て文部科学省に譲渡する。

9. 再委託に関する事項

再委託業務の有無 有・

※有の場合、別紙3に詳細を記載のこと。

II 委託事業経費

別紙1に記載

III 事業連絡窓口等

別紙2に記載